

石川清さん追悼句

直近の遺筆の勁(つよ)さ秋燈下
秋草や山を愛せし清逝く
大らかな慈顔何処や秋の暮
山に立つ人秋光の包みけり
秋浅く余命残してなげ急ぐ
やまびこの帰つて来ない秋の山
丁寧に巻かれしザイル夏の果
思ひ出を肴に夜の新走り
穂高嶺やひときはしるき星飛び
星一つ流れ稜線真の闇
秋彼岸句友惜しまれ逝きにけり
温顔の大人逝くや秋半ば
句会はね新酒捧ぐや三幸園
意のあらば清らに鳴けよ鉦叩き
逝きし友みごとな月を残しけり
秋風や餃子で二次会清さん
花野へと山好きの友夢吟行
川清く苔むす石に秋の風
まん丸の面差し浮かぶ今日の月
銀漢へ別れがたなの汽車送る
仲秋は句友偲ばむそれぞれに

万里子
天牛
恭延
ゆたか
正明
全
全
一灯
青史
規雄
紀久男
全
孤舟
そらお
隆
忠彦
全
弘子
全
亜也

石川清さん遺句三十四句

年代順・紀久男抄出

春雷や古史偲びつつ塩の道
朽ち果つる巨木岸辺に春の波
葉に零抱へて重き若楓
深山に溢るる大気時鳥
蓴菜に命託せり山の水
生氣充つ子等から便り秋の声
新海苔の縮む眩き天日干し
月かかる凍てつく山の道独り
艶の葉に花沈みたる寒椿
――「二百回記念句集」(平成十五年)――
江戸偲ぶ辰巳めぐりや松七日
アルプスを思はず拌み春惜しむ
葉桜の影店に落ち髪を切る
通院も水筒持参の残暑かな

虫の音を肴に独り出羽の酒
名月と暫しの対話家に入る
志ん橋の扇子捌きに年忘る
――「三百回記念句集」(平成二十三年)――
東日本大震災
約束の再会を断つ春の地震(なる)
山好きをやんはり包む春の雨
白球を追ふ子等の声花盛る
友の絵と暫しの対話春浅し
白梅に時(季)を告げられ目が覚めり
春の舞い叶はず逝くや團十郎
公魚をからつと揚げて酒の友
初夏退院二輪の花の可憐なる
白球を追ひし球児の夏終る
黒南風や買物無事の妻を待つ
村長の祈り切なる原爆忌(飯館村々長)
盆明くる灯りともして客を待つ
晩酌は秋刀魚の刺身旬の味
秋雨に濡れて買物袋提げ

新潟(中越)地震

稲穂垂る棚田荒地の草叢に
滔滔と流るる大河秋麗(セント・ローレンス河)
まほろばの料理を膳に古都の秋
誘はれし無月の町の美酒に酔ふ

〔略歴〕 1959年(昭和三十四年)慶応義塾大学工学部卒↓丸紅飯田機械部門(東京)入社
↓バクダード駐在↓機械部門

2013年(平成二十五年)九月十日御逝去 享年七十八歳